道徳：資料を読んでワークシートの問いを考えていこう。

『伝えたいことがある』（教科書ｐ１１３～ｐ１１９）

学習日　　年　　月　　日

組　　番　名前

問１　今まで新聞やニュース、生活の中で差別や偏見に苦しんでいる人の話を、見たり読んだりしたことはありますか？そこでどう思いましたか？

問２　大石さんの決意を支えたものは、何だと思いましたか？

問３　差別や偏見のない社会を築くために、必要なことはどんなことだと思いますか？（必要なことは１つではないと思います。複数個、考えてみよう）

・
・
・

問４　さまざまな人がいる身の回りや社会をよりよくするために、この学習を通して考えたことをまとめてみよう。

【振り返り】

教材について興味をもって読むことができた。	A　B　C　D
自分の考えをまとめることができた。	A　B　C　D
今回の内容（テーマ）について、深く考えることができた。	A　B　C　D

A：意欲的にできた　B：できた　C：あまりできなかった　D：できなかった

提出日：学校が再開してから集めます。後日、お知らせします。

23

差別や偏見をなくすために

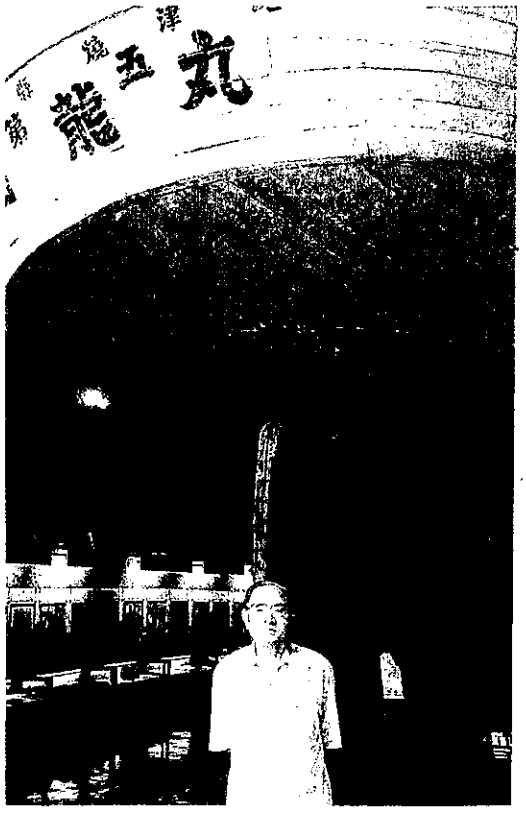
伝えたいことがある

文＊小原田泰久　絵＊岡本順

「私は、どこにでもいる普通の漁師でした。ところが、あるとき突然、何の因果か、巨大な悪魔のかげにとりつかれて、のがれることのできないはざまの中で、大きな波にもてあそばれながら生きなければならなくなりました。自分の人生は、いったい何だったんだと、よく思いますよ。」

全ては一九五四年（昭和二十九年）三月一日早朝から始まった。

一隻の木造マグロ漁船が、マーシャル諸島のビキニ海域で操業をしていた。船体には「第五福竜丸」という黒い墨文字があった。乗組員は二十三人。その中の一人だった大石又七さんは、船室の入り口にあるベッドに横になっていた。ちょうど、①延縄を投げ入れる作業が終



大石又七さんと第五福竜丸

①延縄
一本の糸に多数の釣り糸と釣り針を付けたもの。

わって、仮眠に入ろうとしていたときだった。

急に空が明るくなった。夜明けの明るさではなかった。何事だろうと、大石さんは甲板へ飛び出した。空一面が、夕焼け色に染まっていた。十四歳から船に乗っていたが、こんな空は見たことがなかった。

しばらくすると、ドドドッ！　ゴー！　という海底からつき上げてくるような「地鳴り」がした。地球がこわれたかのような強烈な音だった。ある者はデッキにふせ、ある者は手にしていた食器を放り投げ、ある者はベッドでかたまっていた。悪魔は、次第にその姿を見せ始めたのだ。第五福竜丸は、急いで帰り支度をした。これ以上ここにいると危険だ。船乗りの本能が悲鳴をあげていた。

間もなく夜が明けた。何もなかったかのように、海が朝日に照らされ、きらきらとかがやいている。オレンジの光で明るくなっていた空を見ると、そこには不気味な雲があった。入道雲を五、六個重ねたような見たこともない形。それが、水爆実験のきのこ雲だということを知るのは、船が静岡県の焼津港にもどってからのことである。

光を見て二時間後、帰りを急ぐ大石さんたちの頭上に、白い物が降ってきた。雪かなと思ったという。その「雪」は、デッキに足跡が付くほど積もった。まさか、それが死の灰などとはだれも思わなかった。放射能は、確実に第五福竜丸の乗組員の体をむしばんだ。帰る途中でめまいやはき気などの症状が出てきて、焼津港に入港するや大さわぎとなり、すぐに入院させられた。

頑強でたくましい海の男たちが、あの光を境に、体のあちこちに不調をかかえる被爆者になってしまった。体調は悪化し、入院生活が続いた。仲間がなくなるという

入院中の大石さん

丸が運んできたマグロから強い放射能が検出され、放射能に対する漠然とした不安感から魚の消費が落ちこむなど、漁業関係者の生活に大きなえいきょうをあたえたのだ。また、「早死にをする。」「遺伝する。」として結婚差別もあった。アメリカから見舞い金を受けたことに対するねたみも受けた。

地元にいたたまれなくなり、ビキニ事件の二年後には姿をかくすように東京へ出た。

事件のことは口をつぐんだ。

東京での生活にも慣れ、結婚してしばらくしたころ、悪魔がきばをむいた。それも最も残酷な形で。

「子供ができました。予定日も近くなってお母ちゃんは入院していました。ある日、病院から呼び出しがありました。生まれたのだろうかとかけつけると、『お気の毒です。死産です。』と言われました。被爆のことがすぐに頭をよぎりました。」

奥さんは、カーテンで仕切られたベッドに、かべの方を向いてねていた。気配に気づいて目を開け、ふり向いた顔にはなみだのあとがあった。

「おそれていたことが現実になりました。お母ちゃんはずっと泣いていたのでしょう。結婚したことを後悔していたかもしれない、申し訳ないと心の中で頭を下げました。」

奥さんが二人目を妊娠したときのことだ。八か月を過ぎたころ、奥さんが不安をうったえた。

「産むのはいや！」

彼女のおびえは、大石さんにも痛いほど伝わってきた。日々つのってきた不安を処理しきれなくなってしまったのだろう。でも、何もしてあげられない。いのるしかないつらさを、ここでも味わうことになったのだ。ところが、このとき、大石さんの何かにスイッチが入った。忘れ去りたいビキニ事件だったけれども、どんなに考えないようにしても、自分が被爆した事実からはのがれられ

つぶやき

ないということに気づいたのだ。おびえているだけでは、現実は変わらない。

「不幸よ！　来るなら来てみろ！」

不幸からにげるのではなく、思い切って正面から受け止める。この開き直りが人生を変えた。

二人目は女の子だった。元気な産声をあげた。無事に生まれてくれたというほっとした気持ち。そしてすぐにおそってくる健康に育ってくれるだろうかという不安。複雑な心境だったにちがいない。やがて、三人目の男の子も生まれた。二人とも、何の問題もなくすくすくと育った。

しかし、それで悪魔のかげが消えたわけではなかった。ときおり、そっとしのび寄ってきては、大石さんに言葉にならないつらさをもたらす。

お嬢さんが年頃になったときのことだ。

「結婚しようという相手が現れても、父親が被爆者だと分かると、親や親戚に反対されてしまいます。三回くらい、それで破談になったことがありました。」

このかげはお嬢さん本人が力強く消し去ってしまった。

「最初のデートで『第五福竜丸展示館』へ連れていくんですね。そして、お父さんが乗っていたんだ、って船を見せるわけですね。最初に納得させて付き合う。それでいい人とめぐりあいましてね。」

お嬢さんも息子さんも、幸せな結婚をして、孫も生まれた。

第五福竜丸は、捨てられてしずみそうになっていたのを一人の青年が見つけ、そのことを新聞に

投書したことから生き残る道が開け、展示館も作られた。

あるとき、中学生が、文化祭でビキニ事件のことを発表したいと大石さんを訪ねてきた。その中に、目の不自由な少女がいた。大石さんは、彼女のために福竜丸の模型を作って学校に寄付した。

これが話題になり、大石さんにビキニ事件のことを語ってほしいという依頼が殺到した。自分の中では受け入れている事件ではあったが、人に語るとなると話は別である。また、差別と偏見に苦しめられるのではないか。そんな迷いが頭をかすめた。しかし、その一方では、もうにげたくないという気持ちも高まっていた。

大石さんは決心した。あの悲劇の語り部となろう。核のおそろしさを伝えよう。それが、あのいまわしい事件を体験した自分の使命だ。そう覚悟を決めたとき、大石さんの中から、悪魔のかげは消え去っていた。

考えてみよう！

❶ 大石さんが姿をかくすように東京へ出たのは、なぜだろう。

❷ 大石さんの決意を支えたものは、何だろう。

❸ 差別や偏見のない社会を築いていくために必要なのは、どのようなことだろう。

第五福竜丸展示館で話をする大石さん